

Title	補足議論
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.9 (2009. 9) ,p.184- 187
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事：平成二一年度 慶應法学会総会・研究大会 共通論題パネル「東アジアはどこへゆくのか」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20090928-0184

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

補足議論

(司会) 国分先生、どうもありがとうございます。中国のみならず、前のお三方の報告まで踏まえた話、すばらしいアンカー報告で、さすがは法学部長という感じがいたしました。慶應法学会の研究大会というものは、毎年行われているんですけども、今回は沖繩開催ということで、一般公開というスペシャルなことがあります、それから四人もの報告者に出ただけというのも、通常はないことなのです。せっかくこれだけの報告者がそろっているわけですので、ほかの報告者の話を聞いて付け足したいこと、あるいはほかの報告者の方についてコメントなり、ご質問なりがございましたら、まず報告者の方から出していただきたいのですけれど、どうでしょうか。小此木先生どうですか。

(小此木) それでは一言だけ。先ほど私が北朝鮮の話をしたときに、日本はとことん話を話さなかつたんです。時間に限りがあったものですから。現実には日本が今やっているのはアメリカや韓国との連携を強化しながら、安保理事会の制裁に参加し、それに独自の制裁を追加するということです。そういったものをつけていくしかないんですが、でもこれは当面の話であって、北朝鮮情勢が数年のうちに大きく変動するとすれば、そのときにはや



はり日本も動かなければいけないわけですから、自らのビジョンを準備しておかなければいけないと思うんですね。交渉学の方でも瀬戸際だとか、挑発だとかあるそうですが、確かにそれはそうなんです。

(田村) このまま行くと日本も瀬戸際戦略の状態に巻

き込まれるのではないでしょう。

(小此木) そういうところあたりで、盛り上げた後、何を目指すかというのは、政府はやっぱり交渉をねらっているわけですから、危機の後、本当の危機になってしまいか、チャンスが訪れるかは分からないところもあるんですね。第一次危機の後に「枠組み合意」という一つの米朝合意が達成されたわけですが、今回の危機の後にも何らかの合意が達成されるかもしれない。それで日本はどうするかということですが、残念ながら今の日本の中にはそういう発想はないような気がするんです。

日本は北朝鮮との関係においても、アメリカに次ぐフアクターであつて、彼らの体制を変革させる能力という点であれば、それを最大に発揮できるのは、実は日本ではないかという気がするんです。アメリカは危機管理、あるいは安全保障面で大きな役割を演じるでしょうが、しかし、先ほど申し上げたように北朝鮮の根本的な矛盾というのは体制の矛盾にあるわけですから、あの体制を少なくとも開放、改革、市場経済の方向に持っていくかという限り、実は核問題も解決しないというのが、本当のところなのです。

ただ、そういう回り道を主張することはなかなかばかられて、すぐに問題を解決しなければいけないという議論になってしまい、感情論が先に立ってしまうから、

なかなかうまくいかないのであります。しかしそういう事態が訪れたときには、日本がそれだけの役割を持つているんだということを、自覚していかなければいけないのではないかと思います。

(司会) ありがとうございます。次に田村先生どうぞ。

(田村) 今、小此木先生がおっしゃったのですが、私は政治学が専門ではないので、あくまでこういう議論もあるということ、紹介をさせていただきます。交渉学の世界ではエスカレーション・アンド・ネゴシエーションという考えがありますが、これは軍事的に段階をエスカレートさせ、それが相手国へのメッセージとなり、自国が、より優位な立場に立つて交渉をしていくという考え方です。

北朝鮮にとって和平というミッションに対して、B A T N A という代替案は実は軍事行動になるのです。つまり軍事行動をちらつかせているから、逆に和平交渉ができてしまうという、恐ろしい交渉のロジックがそこにあると聞いています。エスカレーション・アンド・ネゴシエーションのもう一つのポイントは、実は相互の理解がそれなりにあつて、心理戦を一定の理解の下でやってくるから成り立つ話であり、北朝鮮の場合はそれがよく分からない。このような瀬戸際戦略は、エスカレーショ



ン・アンド・ネゴシエーションの内容がわかっているの
 ならありがたいのですが、わかっていないかもしれない
 とすると、交渉の難しさを感じます。その点はまた小此
 木先生に教えていただければと思います。

(小此木) それは、北朝鮮を甘く見ている。彼らはその
 ことをよく分かっています。そういうことばかりやって

きた人たちですから(笑)。

(国分) 中国が北朝鮮のことについてどう考えている
 かということ、一つだけお話ししたいと思います。ご
 承知のように、北朝鮮は経済的にはものすごく中国に依
 存しているわけです。ですからその意味で、一種のライ
 フラインは持っているということは事実です。

しかし、国家関係ではもちろん表面的には悪くはあり
 ませんが、影響力には限界があるという部分もあるわけ
 です。北朝鮮が相手として話したいのはアメリカであっ
 て、中国ではない。六者協議というのは、これはアメリ
 カにとってみてもそうだけでも、北朝鮮の核の問題で
 はあるけれども、同時に中国がこれに乗るかどうかがア
 メリカの最大のテーマの一つなのです。

つまり、六者協議で中国がステークホルダーになると
 いうこと自体、アメリカにとっても非常に大きな意味が
 あったという点で、六者協議はアメリカにとっては大成
 功だったという面があると思います。中国にとって北朝
 鮮問題というのは、三八度線の維持、この現状固定が絶
 対であるということ、つまり、基本的には現状を変え
 たくない。しかし二つ目には、北朝鮮に中国的な改革
 開放を一部でもやってほしい。それから三つ目には、非
 半島に核は不安である。しかし、北朝鮮の生き残りを保

障できるという点がないと、北は絶対に核放棄にのってこない。いずれにしても中国にとつてみると、従来の六者協議はそろそろ限界にきているという部分があるわけです。つまりこれ以上、中国が六者協議の議長をやっていると、自分に責任が来るかもしれないから、というところを非常に警戒しはじめたというのが事実ですね。結果的にはできるだけ責任を回避したいというのがあるかもしれない。やっぱりアメリカに相当依存する、アメリカの対応いかんであるという形になるでしょう。今後米中間では、このあたりの具体的な議論が相当行われるのではないのでしょうか。

(我部) 沖繩は南にあつて、北から来た人を脱北者と呼ぶんです。これは冗談です(笑)。ローカルな問題が北朝鮮にとつては重要な、グローバルな問題で、そのために核兵器の核配備をしたんだという話ですが、それと逆のことなんです。領土の問題のように見えて、実際にはもっと重要な問題であるというのもあつて、たぶんこれは安全保障でいえば、沖繩の基地問題は沖繩の中の問題であるように受け止められているようですが、それは大変な間違いであつて、沖繩の問題でももちろんあるんですけれども、それ以上に米軍基地の存在が、日本の安全保障や地域の安全に大変重要な役割を担っているということなんです。

これは、ただあればいいというものではなくて、結局このプレゼンスをどうやってマネージしていくのが大変重要なことになっていきます。これまでは維持することがマネジメントだと考えられますが、環境がどんどん変わっていく場合に、安全保障のマネジメントとがより重要になっていきます。その意味では、変化に乗れるような日本の安全保障構築が、重要になってきています。今のところ日本からのマネジメントの発信はほとんどないような感じがします。

(司会) ありがとうございます。

(二〇〇九年六月一三日開催)